遞信省認可

いらつめ第六十四號目次（明治廿三年八月五日）

●文藝美術…採蓮女（唱歌）
橘さち子＝本吉みは子＝狂太郎＝菊池清＝小田よし＝松乃＝横山ひろ子＝翠岡亭主人
○採蓮女（文章）
井蛙女史＝芮園居士＝飛縞子＝松の舎主人＝藤元わさ＝後樂散史＝山崎ひで＝不知火女史＝中村はあ＝橘さち子＝三坂たね
○高尾山紀行……佐々木信綱 やまだ美妙

社告及び社則　いらつめ一部並製金二錢五厘郵税共金三錢、十二部金二拾九錢郵税共金三拾五錢、二十四部金五拾七錢郵税共金六拾九錢、三十六部金八拾四錢郵税共金壹圓〇二錢、四十八部金壹圓郵税共金壹圓二拾四錢〇別製一部金三錢五厘郵税共金四錢、二十部金六拾五錢郵税共金七拾五錢、五十部金壹圓六拾五錢郵税共金壹圓九拾錢〇並別兩製共前金領收の上で無くてハ差上げぬ事〇府内に限り無郵税〇毎月二回（五日及二十日）發兌〇金子御差し送りの手續きハ郵便小爲替なれば拂渡郵便局と ある處に　神田郵便局と記し受取人欄内に（神田平永町九番地成美社）と御記入の事〇郵劵代用は郵便爲替の無い處に限り五厘切手で一割増しなれは妨げ無い事〇見本は五厘切手で並製五錢別製七錢領收の上差し上ます〇廣告料一行金八錢、割引無し

從第五十八號至第六十七號十部版權所有
明治廿三年八月四日印刷　明治廿三年八月五日出版
發行人　東京市神田區平永町九番地居住　山田武太郎
印刷人　東京市本郷區駒込西片町拾番地居住　山本鑑之進
發行所　東京市神田區神田平永町九番地　成美社

本號より
懸賞文藝　採蓮女（唱歌・文章）　佐々木信綱及美妙齋　高尾山紀行
次号より　牛乳營業取締を望む　及び神宮みね子嬢の縫取獨學び
前号には　コレラ預防法

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

文藝美術

第二十四回懸賞文藝應募得点

題　採蓮女

○唱歌

（イ）

ゆふ風さそふ池の邊に
露ちりかゝるわか袖の
いざもろともに打むれて
かをれる花を手折まし。
我らもともにてにとりて
玉とも見ゆるうつくしき
なきとはいかにくやしきと
空よりふりくる村雨ふ
天津乙女のたまもれと

右第四等賞

（ロ）

めぐりたゞへし濁り江の
薄くれなゐの色添へて
はちすの花を目よとめて
岸をはなれてゆく水の
手さし伸ばしてとりかはす
人のめでたる古事も

福　さち子（トイワ）

たちつゞゐれば蓮はの
いとゞすゞしくありにけり。
池のみぎはよおりたちて
にごりにしまぬ心をば
世のはらからのつとにせん。
露をそのまゝ折よしの
思ふをりしもはらく〵と
心に思ふつゆの玉
手折るも嬉しこの蓮。

本吉　ミは（シガ）

にごりようつる影さへも
いまとさかりと咲き出る
衣かゝげしたをやめの
深きこゝろはしらねども
花は濁りに染まじとて
おもひなはせてたをやめの
こゝろのほどこそゆかしけれ。こゝろのほどころゆかしけれ

あなうつくしやはちす花
濁りに染まぬはなの色
とるかならぬかうのれめの
なだ濁よする池水の
おのが心によそへんと
みづからつぎすはちす花。

狂　求　郎（イヒ）

（ハ）

いけ水の　濁りに染まで　咲き出たる　はちその花
を　きはひあく　手折る乙女の　心ぞゆかし。

菊池　清（ライキメ）

（ニ）

なつ深み翠り色こき其中に　目に立つ花の乙女子が
はちす採ることそゆかしけれ。　其花はちそ池水の
泥のうちよりぬけいでゝ　にごりにしまぬ目出たさを
巳の心とゆふだすき　うけしや袖をひらく〵と
風よもまれて中々に　舞のたもとに似たるらん。
葉よおく露は玉と見え　日は新粧と照して皆そこに
うつれるかげもなごやかよ　何れを花か乙女子の
雪のかひなよ折られてし　花にあさけのなるあらば
如何ようれしき契りぞや。　折しも彼方よおとたてゝ
ぱつとひらくる一輪の　花に先とば越されじと
玉と散して飛ぶ魚の　心ときめく眺めかな。
こゝろときめく眺めかな。

（ホ）

山田　よし（ミガコ）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

にはひも消きはちす池
氷のおもてよ影うつす。
手折りてぬらす一重袖
されど手折りしその花も
思へばよそも袖のなみ

(へ)

ゆふ日の影のてり弱く
かろきもすそは羽衣の
手折れる主も手折らるゝ

(ト)

はあみ似たりとはゝゑとし
つゝれの袖とぬらしつゝ
池の面よ震ふ乙女子の

以上六曲第三等賞

小舟浮べし少女等の
匂ひこぼるゝはちす花
滴るつゆのすゞしさよ。
世になき人の手むけぞと

梅　乃(イヘシロ)

池の面つたふ風すゞし。
持てるうちはゝ羽に似て
花もはちすのやさ姿。

同　上

ひらしがたりにひきかへて
手向のつとゝ手折る手の
こゝろの中ぞあはれある。

(チ)

いけの蓮の白露の
濁りにしまぬ村肝の
とれる袂をふきかへす
玉もこぼる　花盛り
心も清きたとやめが
風もすゞしくかをるあり

横山　ひろ(カヒガ)

をと女子よ　深くおいりそ　にごり江の　こゝろし
られぬ　蓮葉の　浮葉につゝむ　しら玉ハ　露にこ
そあれ　手に取らバ　消えもこそすれ　をと女子よ。

(リ)

その葉ぞといはれあ　はちすとるひそみ。
こぼさぬが手柄ぞ　はちすとるひそみ。
また咲きしはなか　はちそとるむすみ。
どろに肌よごすあ　はちすとるむすめ。

右第二等賞

翠岡亭主人(ハウキ)

右審査以外

○文章

(イ)

月

井蛙　女史(イヘシロ)

雪花の眺は愚の酷暑の夏も凌ぎ得ていつしか秋の夕空や四方の千草も何となくあはれをそふるうらめしさ。　只一人書齋に閉ぢ籠り、しきりに雑誌を讀み居しが如何ありけんふと起上り外に出で處々方々と歩むうち早や日も西に入りあんとしきりに歸途と急ぎしがこはそもいかにもと來し道とハ大違ひまつくらがりの山の奥いかゞせんかと途方に暮れ、一時茫然たり。　かくしていつまであらんも益なし、我と我が氣をはげまし、やう／＼に人里近き野原に出で、やれうれしやとほつと一息はるかあなたを見わたせばこゝより程一町もならんと思ふところに一の大なる蓮池なり、其中に人とも思はしき物の見ゆるまゝもしも人にてあらんか行きて尋ねん、おうさうなやとうなづきて近のよるまゝによく見れば案に違

はず人にてありけれバ大に力を得なほも道を急ぎしに早くも池の邊に來にけり。　やがてそこに立ち止り其人をよく／＼見るよそことなう面影のなつかしく、誰ならんと暫し見つめやう／＼と考へ見ればあの愛友浪子孃よ相違なし。　されど彼れハ先月試驗に首尾よく卒業し此二三日前既よ出京の趣なりしに如何なれは今こゝに居たまふぞ。　如何に定めなき世とは云ひながら僅か一ヶ月余の其内にかくまでもれちぶるゝものなるか。　かやうにつらき身の上ならなせ玉らてよは告げ給はぬか。　あなうらめしの浪子孃。　あないまそしの浪子孃。　問へと答へのわらそこそ彼方ハ一心不亂よて進のみ探りて此方へと見向きもやらせ玉らはの氣をいらつのみ。さといへもしも人違ひよてもあらんか、よりて尋ねん事問とんと歩まんとそれぜ足立たず、呼び寄せんとそれぜ聲出です。胸も轟き氣も擾亂、一聲ありと言葉をうけなんとしきりよ氣といらち身をもがき、その物音にびつくり醒むれバ身ハ机にもたれつゝ居眠りの夢にてありき。

（ロ）

芮園　居士（シフゴ）

縱十間に幅五間程の池。　水ハさはぜ清麗とといへないが娟然として日光よ笑ふ花蓮は誠お泥のうちよりぬけいでゝ、少しも濁りにしまない殊勝さ！　可愛さ！　床しさ！　何といひやうもありません。　水面ハ老の若の知らざれども皺は少しもよることとなく、空氣ハチルドレンの域と脫したと見え少しも騷がない、極く靜穩な日和……突然！　此サイレンスが彼の意地ゐるい惡らしい風伯のために破られました。……同時にこの可愛なる殊勝なる……あゝ……あはれ――蓮ハ斬首！　一片二片落ちたまゝ水葬……驚ろかされて水底よ逃ぐる鯉。餌と思ッて啄く金魚。水の上ハ俄かに賑やかになりました。　發矢！　一齊肅然……あら何の仕業でしやようか？　二三の乙女連、否な活花連です。　花欲しさうに池の水涯に佇んでをります。

「清川さん蓮ハ實に美しいものでありますねヱ。」

「さうですねヱ。　殊に此の池こそ府下第一だとの事です。」

「さうだと見えて先頃から觀客がたえません。」

「それハさうと奧山さん。　妾はヲ此の間蓮見よ來ましたらあなたの……に遇ひまして。　妾ハおなたの一所に來たならばと思ひました！」

「清川さんおよしな！　妾と氣の毒で仕方がありませんから……」

依て二人と話柄と轉じて四方八方のことを語り出しました

「清川さん。　あなた本月のいらつめと御覽でしたの？」

「いえ……まだ……」

「いろ／＼の記事が出て面白くなります。」

「ほんにいらつめと妾等の朋友ですね。」

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

時に數多の觀客ハ三々五々ちりんぱりんと散じ池の邊も寂びしくありました。　二人のとゞめは何氣なく話最中ゴーン〳〵……上野の鐘？
「遲くなるといけませんから歸りましやう」。
「一寸御待ちな一本採るの〻……」
と岸の栁に手をかけて風に吹け、蓮になびけど手を延ばし辛うじて採り得て嫣然！　暫時これをうのざし、
「泥のうちよりぬけいでゝ……」
合唱「にごりにしまぬ花蓮……」
鶯ならぬ乙女、梅ならぬ蓮なれども兎に角鶯梅の好一對。
氷面靜肅蓮花唇動きて嫣然たり。
以上二章無賞

(八)

あら無殘！　採蓮女　　飛鶴　玉(トイヤ)

若々とした新らしい緑の葉と上野嵐に吹かれて、瀲灔たる水上に浮んでゐる不忍池の蓮。　數多く高尚な淸らかな花を咲かせて、爽さりとした匂ひを薫らせ、路行く人に「泥の中よりぬけいでゝ、濁りに染まぬ蓮しな……」と賞でさせ、誇らんとまだ小さき盆のやうな若葉の中から根親の心配。其中に惡魔！――蓮のためにも――其根を採ッて人にひさぐ採蓮女。世の中に素なくて末榮もる道理ハないもの、今幼きをちてちも知らぬ黄口兒の兩親、しかも生れて年月も積まない中に、黄泉の人となつたときは其小兒ハどうなりましやう？　併しこの採蓮女決して左く無慘な女でハないです。　何故！　聞いて見れば、
「哀れッぱい話なれど尚更悲しくありますが時々想ひ出すたびに妾しほど不仕合せなものハないと思ひます……あなたゝから何もうちあけて申しますがネ、妾のこの家へ來ましたハ去年の春でございました。　來て……丁度夏のかゝり夫のは……始めて風邪ぶらうと思つてそんなに心配しなかつたんですよ。　夫れだからうッちやッて置きましたがネだん〳〵とそれから重くなッて來るもんですからお醫師さまに診察てもらひましたが只今御覽の通りのやうなもんですから……充分養生も出來ず……お談しゝても涙が……十日余りで、ま……あの世の別れ。其晩妾しを呼んで、
『ゆ…るしてくれ。　だん〳〵と厄介になッて……どうかお前も里方へ戻り嫁入をして吳れ……だが此上のお願ひ老親も大分年がいられて充分お世話も……只賴むハあの子お前の知ッてる通り己れが死ねば他なたよるものもないもれ……どうか眞の子と思ッて賴むよ。　お前がくるから誠の母のやうに慕つてゐるんだからどうぞ賴む……よ……よ』
……………そんな次第ですから妾しはどうなッてもこの家は……それだから精々働らきますけれど何と申しても女の力、悲しいことにハしやうがないんですよ。　だから心ならずもこんな營業に……ほんとに妾のやうな不運なものハなか

らうと思ひますよ」。

涙ながら話したこともある。　この點から考へれても有情と無情と何れが貴重いでしやう？

あゝ蓮！　潔白なる蓮！　もし靈あるならば忽ち多望ある將來の花とも觀ず、喜んで吾命と捨てゝ其人の爲めに犧牲とならうと言ひましやう。　濁りに染まぬ巳が清き心を示さうと言ひましやう。　この世の中に濁りに染まぬ蓮の如き人は……嗚呼高潔なる蓮の花！　嗟々可憐なる採蓮女！

（二）　　　松の舍主人（ワンゲ）

三伏の炎暑は威を逞うし四方の山々も深緑となしてゐます。　緑塊は蟬聲を以て充たされて、鶯や杜鵑も所々に朗らかに鳴てゐます。　蓮池は青錢が滿ちて水の色も見えません。青錢を臺とし傲慢に拔き出て莖が淡紅爛々人と惱殺そと云ふ美花と載てゐます。　無情の蟬もこの蓮花をめでゐるか殊更池に添ふた林に鳴聲が騒しいやうです。　小魚もこの美しい姿を眺めたいかふはと浮んでは尾を鰭にふれて、爲めに大事な姿まで動かして行きます。　この時二人の少女が池の邊に來てパンと少しつゝ切ッては投げますと小魚はふはと浮んで銜えては沈みます。　少女は始終はゝといふ聲をもらして、パンを投げつゝゐますと、この池の主とも云へる容子にて來れる少女が裾をかゝげ、袖つまとりて今水に入らうさま、

△「れゝ少しよして下さいな。　鯉がにげるよ」。

□「勘忍よ。　私しが今蓮の葉をとりに來たの。　花を取ッて上げるから御免よ」。

少女は水に入ると間もなく夕立が降ッて來ました。　三人の少女は亂れた髪から雫を落しつゝ遁々近傍の雨小屋へ逃げ入りました。

＊　＊　＊　＊

夕立の跡がばッと晴れ、夕陽も林を通して斜めにさします。冷しい風にうのされてか蟬も精一ぱいに吟じます。　三人の少女は池の邊に樂しさうに話してゐます。

○「れゝ冷しい……蓮がまアみんな砕けて雨が落ちますよ」。

□「雫のたれるのはいゝがそんな砕けて」。

△「この雫に魚はまた雨が降ると思ッてるでしやう……い、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、まア御覧パンの切れが半分葉に半分水にかゝッてゐて魚が來てとらふとてあばれて逃げますよ」。

□「れやは、、、、」。

△時にこゝに來かゝッた一人の男、

男「おゝよく咲き揃ッてる、美しい……姉さん一寸一つ採ッてお呉れな……あゝいゝ花です……そこらに何かありましやう」。

と無骨の我無者流の男でも一つの花を欲しい爲先にこんな小見にさへ丁寧に言葉かける殊勝……否花の殊勝さ。　又來る一人の女

女「わたくしふも何卒一つ……」

一人來て一人止まり、二人來て二人止まり、池の邊へ人が隊をなして、主人の少女が蓮葉を取るを見てゐますの。否寧ろ花を見てゐるでしやう。嗚呼これあればこそ夏の景色も美ありといひましやうか。

（ホ）　藤元あさ（ナカ）

みどりの波小さい紋を織る中にあちこち立並ぶ幾洲の蓮夕日に姿をやつして、有勢の畫無勢の詩もまこと及ばぬ風情、

「はら君見玉へレディのそれ……」

「あゝ蓮花と採つてゐる。　何處だ。やア分かりました。どうもビユーナフルだね。　船の中から纖い眞白な手で誰家の優美的だらう」。

「夕陽に美人が蓮花を採るッて。丸で畫だ、活畫だ。併し彼れ蓮花は幸福ものだ。　よし生命を失ふにもしろ美人に手折られるんだから。　僕は則ち天武氏の張六郎の再生だし蓮花は六郎に似てゐるから、眞當にあの美人に……ハヽヽおい君、櫻處逸見君默ッて何をしてゐるのだ。　惱殺でもされてゐるのか。　多情的の男子ぶね……」

「馬鹿をいふなられだ。　あれを題にして杜牧之其處のけの詩を作らうと思つてゐる最中だ。　惱殺の二字はお氣の毒だが君に返却だ」。

「能く言つてゐらあ。　あれを題にするッて、早やそれが惱殺されてゐるんだ」。

「君の如き審美心に乏しい人間じや仕方がないさ。　採蓮女といふ題で文章でも唱歌でもいゝから一つ作り玉へ。」

「ハヽヽいらつ姫の廣告としてゐるのう。」

「ハヽヽヽヽ」

（へ）　後樂散士（ナカ）

あを葉がよひの朝風に吹かれながら池の邊と彼處此處と逍遙ふのは一人の乙女です。　見れば身裝も左程立派ではなりません。　が、何處となく奥床しい處が見えます。　然しなぜこんなに早く起きて彼處此處するのでしやうか。　病氣の爲めの運動？　さうも見えません。　綠の黑髮は品よく絹網にまかれ、そして顏色も格別病氣だと思ふ樣な處は見えません。　が何處となくうれひ顏です。　それに不思議なのは今にも一降りなりさうな雨雲が兩眼を蔽ッてゐることです。　視線は何時も池の面と彼處此處と働らいてゐます。　今日は文月の初め、まだ盛りとはゆきませんが源平の蓮が白玉の露を戴いて互に先陣を爭ッて溢るゝばかりの笑顏と朝風に獻たせてゐます。　あゝ實に美……美人です。　俗塵に染まぬ深窓の佳人です。　が、此の乙女は美人の命を絶たうとして來たのです。　今迄は氣が付きませんでしたが能々見れば乙女は片手に花鋏を持てゐます。　それで漸く解かりました。　最前より彼處此處と歩みながら視線を水面に働らかせたのは

――それが一番い、だらうと花の命を擇んだのです。乙女は屈みました。そして雙の手を差し延べ二色の花を惜氣もなく切りとおしました。でも無殘……罪もない花の命を絶つとは……が、乙女の心は命を取らるゝより苦しいです。なせでしやう？ 兩眼の雨雲が實にその代表者です。乙女は力なさゝうに立ち上りました。獨言！ が、聲が顫んでゐます。

「植ゑおきし池の蓮も昨日まで母に手向くる花と知らずに……居たものを、今日も此花を……あゝ實に人の命ほど果敢ないものはない。父上には幼稚い時にお別れまうし、御顏も碌々覺えぬほど、それにまた母上にまで……實に妾ほど世の中に不幸な……」

今迄耐へた涙の雨もばつ〳〵降り出しました。片袖を面にあてゝわッと泣きぶした聲に思はず驚かされ目を覺ませばいらつめを面にあてたまゝ散士が午睡の夢でした。覺めての後も乙女のうれひ顏が目先にちらついて實に憫然です。採蓮女！ 採蓮女！ あゝ此乙女の行末が案じられます。

以上四章第四等賞　山崎ひで(トウケイ)

(ト)

をるも惜しをらもぬをしき蓮の花、高山さんどう致しましやうね」。

「へ、、其れがお前の洒灑といふのかへ。可笑くもない」

女中は心の中に「眞實に厭な人だよ。又あんな事を」

「だつてあなたお嬢さまが折つて來いと仰やるではムいませんか」。

「おやへ、、是れは可笑しい。それではじめて洒灑になッた」。

女中は物とも言はず脊を向け、蓮花の側に屈み、太く肥え脹らみたる左の手にて蓮と握り、右の手は短き指に長き鋏と持ち、窮屈さうに丸くなッて、蓮をきり取らんとする其樣が可笑しいとて高山といへる男は獨り笑み、いッそのことに池の中へおッこちて見れば面白いくらゐに思ひゐるなるべし。折から武藏野の草より出たる日の光り家の棟をこえ、はや下女の足下とうろつき、左の瞼とあからめ、其處等あたりの二つ三つ五つの蓮の花のつぼみをさまよひ、ときはお近き草の葉の露五色の光を放てり。實に極樂にましますときく阿彌陀如來の御坐近かく生れた冥加な草の葉まで露の恵をうけ斯くはきらめくものと知られたり。高山は尚ほも惡口を云ひ足らぬと見え下女の側により、

「この日の當ッてる花は皆んな美しいが一つ見にくい花がある」。

「おや左樣でございますか。私には同じやうに見えますが」。

「さうだらう。何れお前には見えないよ。おや〳〵と

かく探れたね。　どれ拜見。　是れハ仲々美事だ。　そ
してよく似てるよ。」
「何にゝで御座いますゥ」
「お前にさ。」
「御戲談をおつしやい。」
「戲談ぢやあいよ。　花があいとほんとうよよくお前よ似
てるよ。」
「いやですねェ。　そんなら私ハ頸から上がございません
う。」
「あにさ花があいと蓮葉だらう。　お前ハ……だから分か
つたゝらう」
下女ハ分からぬと見え、暫らく考へゐしが聽てみつこり笑
み、
「初めに私を……あまり惡口を仰つたものだから今にあつ
てあんなことを」
評　筆は熟しませんが意匠が斬新敏捷です。

不知火女史（トロケイ）

（十）

ぼォん〱引鐘鳴らして日ハ入りぬ。　猥々たる退き口西の山端にハ幾流れか美しい旗差物引きちらし、夜ハ月の支配とあれり。　天と地との界、其見苦しさハ霞の幕まで立掩ふ。　二三羽の鳥はあれ〱忙がはしげよ羽音響かして飛ぶは女帝の光臨を知らする——靜にせよのお觸れ。　そよ〱と木立にさゝやく風の音。團扇持つ手も靜まる。庭の小池。水音高く飛ひこむ蛙。なあ心あや蓮葉いたまん。　村雲のそだれ捲き上れバ氣色うるはしき玉の面いとのしこくて慕はず褄のきなはす。　粧も半ば。つき人も疎らよ二つ三つなちこち。　蓮葉　盛れる白玉。さては此處が星の隠れ家。　盛りに咲きたる、そも誰人を俟つ。　おもはゆげにうあぶれたるハ蕾。馨しきろが香にハ慾念頓に消え、六根淸淨。　葉末の星うせて、天上ハ光の粉と撒きたるよ似たり。　書齋の障子明るきに涼しさ身に染えて立ながる。　されど其捨て難きハ蓮。吹く風よ伏して袂を曳くのと思はる。　もとよりなきしよわらねバやがて一朶の花を伴ふ。　色香とのそ愛るにならず、泥より出づる心をぞ、なやからんと。

（り）

中村はあ（イセ）

岸の柳に玉水の余波を殘して居る多立晝の熱さと洗ふて池の涼しさも一入加はり、池一面よ錦あす蓮の花も露と含んで浴後粧を凝してゐます。　それをまた騒して淸かあ香を送る夕風の心地よさ。　蓮葉の露玉と圓めたり碎いたりして、輕く遊んでゐます。　其涼しい眺めの中と紅白の春を載せた桂舟よ棹して花を採るに余念のあい乙女「荷葉撥深難問路」と云ふ風情です。　鴛鴦の夢を破るまじと靜かに舟をなやつる工合。其度々白薔薇の簪がさも危ぶなさうよ頷いてゐます

そよく吹く風、乙女のたをやかな姿に馴れ〱しくさはりて雪の肌も露らはにふりの袖と飜して居る様子。わる風までが多情の恨の種ふあります。　それよ伴あふ力あさふうな漣漪。けれど舟の動き。知らず、わら………跡の笑ひ聲。定めて花と隔て丶斷腸そる人もありましやう。　てもこの一幅れ活畫。數多の詩人を惱殺そることでしやう。

評　甚だ艶な想像に富んだ文です。

以上三章第三賞

（又）　　　　　　楊　さち子（トヮケイ）

今年は忍ケ岡のほとりにことそきたる家ゐもとめて、春は花、夏は時鳥いとをかしくてはよそひもれそへましと嬉しく老たるそしため一人ゐれど何かよつけてこちたきに又一人十三四のそしため置たるがとさなけに物かたりそるもにくからず。　そば近く召遣ひて、けふもなつけれバなふぎおらして池の面に咲きそめし蓮花かぞへてまぎるゝ、折しも池のほとりに人のけそひしてりれバ何ぞと見れバくれおゐの蓮花折りてゐけれバなお今かぞへし花の中かわらぬかちりをもそべしと思ひし物をとくやしくめのとらはよ目くばせすれバ心得てはしり行き、大ごれたるこゑにてぬそ人までといひけれバ其人おどろきてふりわはむけバ思ひきや此家なかあひし時來て何くれとあうまめ立てより日毎に來る女なれバ我もひたおきれになされし折からめれわらはに引かれていたくおもあげよ入り來り打ち巴ぶるもをかし。

常に似ぬけふのふるまひと其心ばへとをとふに女はなをださしくそて、此ごろ母はやまひによりて打ふしかつ世のむつしきによりて萬心よまゐせねど此うつくしき花と見せて、うき事つもる老の心をあくさ先ぞやと出來心よりつくりしつさはもるさせたまへとくりかへしいふもなはれよ聞こえて孝の一字すてかふくふさ〱物とらせてかへしやりぬ。

つく〱思へバ孔子も孝は德のもとゝをしへたまひし。我等はたらちめもあけれバいでや祖母君に孝行せぞやと思ひかのくちまめなるめのとらはよつかひの事いひつけ、けふわりし事いそせて神田の祖母君のもとへ蓮のそな折りてもたせやるとて、

風だにもいとひし物と蓮の花
　はやしら涙のたちてけるかあ

かくいひやりたれバ祖母君いといたうよろこびたまひしよしは又めのとらはがおちなくかへり事いひたり。　とらも心たりて、かへしとなるを見れば、

まら涙のた丶さらましのけふのこれ
　蓮はいくでわらも見さらん

此あへしの我心れ村雲それて打ゐむ折しも老婆來りて今朝まで見さりし池れしきにしろき蓮咲きそべりしとれしらせに庭下駄はきていそぎ行き見しに花のそがふよはいえもいはれ

ず見せてやりたく、折とりてうちにもて來てかえよさしつゝへん昭のよまれしうたくりかへしてきんじ、猶さら思ふ宇宙の美妙。

（ル）

藤元あさ(ヒサオ)

今日も七月二十一日。まこと歩ひよも忘れ難い吾があきは母れ命日。思へと念へバ樹靜かならんと欲そるも風止ます、子養あてんと欲そるも親ゐまさぞ！生前蒙ッた海山の大恩。嗚呼それに報ゆるも復何の日？

南無阿彌陀佛！　南無阿彌陀佛！　位牌の塵も拂ひ了り、手向れ花を求めんと獨りイむ蓮池の曉！　咲き匂ふ紅白幾十点の蓮の花貫きとめぬ玉を飾り、香吹く涼しい風も徐ろに緑のまる葉を飜して、夢結ぶ蜻蜓の羽を現てし、湛へる水の靜けさ。　生ひ茂る汀の草れ清けさ。　滿目れ風趣ハ此世を隔てた仙世界。

「此景色のいゝ事若しもお母さんがおゐでなさッたら嘸…世間にハ七十八十の年賀をする方も澤山あるれに僅かに四十位で……何故あんあに早くお死にあそッたの？　羨ましいれは吾友達朝夕の母保養それに吾身バかりが……忘れもせんあの盂蘭盆れ日であッた。　吾身をお連れあそッて祖父上れ墓參りそる路すがら……此蓮の花れお話し……あゝもう思ふまいゝゝ、思ッた處が只涙ばかり」。

千々よ砕くる吾心、無理に押し鎮ひ、かよわい手を差しのべして、發矢！　折り取る一莖れ蓮花清淨潔白の白蓮花。

（ナ）

三阪絹(ヒサオ)

おゝあそこに可愛らしい蕾のがありますよ。　あれも採りましやうか」。

「おあぶなう御座いますよ。　もう白いのも赤いのもこれで澤山です。　おやめなさいませ。　わたしの母ハね大層此花が好きで御座いまそから歸ッて見せましたら喜びますでしやう」。

「御話しで思ひ出しましたが支那では昔し芍藥を折ッて贈ッたもれでそとねェ」。

「お母さんよですの！」

あゝこれあぜけ無さ。

「いゝえさ」。

「誰よ？　どんな時に？」

「御存じ無いの？……」

ちッと……男あらバ昔の六郎。花に似たとか花が似たとか論のあるべき—相手れ顔を暫らく眺めて、更に感心したといふ思ひ入れ—

「あなたハ理想的淑女でそねェ」。

「どう理想的？　一つも欠けた處が無い！　は、、知らぬといふのが何より淑女れ資格に欠けてゐる證據で御座いますハね」。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

「まらせともいふことなのですよ……引換へてまたしいは
んとに池のこれですねェ」。
指さした指先。氣付のぬまゝ、
「何？」
「蓮葉といふことでさアね」。
評　二等でも上乘の方です。句法のやとんど老筆です。
以上三章第二等賞

高尾山紀行（一）

佐々木信綱　原
やまだ美妙　添

（三字下りに書いたのは美妙の筆です）

高尾山の夏の景色見んと山田美妙ぬしのそゝのかさるゝにかねてもかしう思ひゐたれバとミに思ひ立て、七月六日あけぼのよりおき出ぬるに、昨日まで降りつゞきゐる雨名殘なう晴れて、朝日くまなうさし出たるまづ嬉し。かしこい嬉いとおはしときけバ其まうけに紺の單物を着、紺のもひ紺の足袋をはき、わらぐつくゝる折しも美妙ぬし大川晴雄ぬしいざとて來たらる。美妙ぬしの洋服、晴雄ぬしの縞の單衣に袴高足駄なり。

おなじ山、されど木はなを、水は白。

三人三色の姿にて車を走らせるに道ぬかりてとくもかねバ汽車にのりおくれんといと心もとなし。からうじて新宿の停

車場につきてのる。

新宿過で吾々の車夫と餘處の車夫と競爭の始まり、吾々の車三挺は一列に大道と並び進んで其間から相手を拔け出させず、しかし走り方も電光石火。つまり是は始め向ふの一寸とれ／＼のと拔いた復讐。

いあづまや、いやての雲とつきやぶり。

かくて中野とみぐる比又今日も空少しくもりぬ。立川のこなたより甲斐の山々連なりてそゆれど半バ雲の立ちおはひたれバ、

都人けふれとひくとはおもぬらし。
雲のうそぎぬ着たる山のな。

と口ずさふに、美妙ぬしそは余りの我ほめなりと笑ふ程、

とは山は雲のうすぎぬかつぎけむ、ちりの都の人をいとひて。

多摩川にきぬ。水い少なけれど川原より車に吹きいるゝ風いと涼し。

手つくりをさらす子もなしいつよりの
かくはなせけんたま川の水。

まゝの万葉に

多摩川にさらすてつくりさら／＼に
何ぞこの兒のこゝだかなしき。

と見えたるわたりなり。こゝのむかひに堤めきたる岳あり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

そこを古き歌にみえたる向の岡とも、つゞきは岡ともいふときけど、歩行ならばくはしうとひきゝまをしけれど車は走りゆくといふにせん。　さて國分寺よりのりし田舎女はいとあやしき姿あるがいたゞきたる子はまづ二つばかりにてさるかたにらうたく、うきふしなけあるさまをあはれと見ゐたるに日野よりおるゝ時ねふりたると背おひ、調度あまた持て出でんとするに子は頭横にかたふきたれば、あやふし〳〵かしら〳〵と人々いふをきかず顔にて出るよ。いひし如く窓木に頭打ちあてぬ。　おどろきてわと泣くをかへり見もせずいそぎ行けば、人々都も鄙も子を思ふ情はかはらぬをさても心なき女かなといひしろふめり。　八時過る頃八王子につきぬ。

停車塲前は茶屋に休むと主婦は口達者に耳も遠くもある程。切口上で世辭は百萬遍、出した粕庭羅と共に油氣が抜けて一々耳にとゞる言ひ方。これ行遊中これが第一は奇でした。

しばしいこひて、　人々道を知らねば車にのりてゆく。八王子の宿は織物の其名高く、甲斐は國に物そる道よてもともよろしと聞きつるもしるく、家ゐ立つゞき大路もいと廣く賑はゝしき里なり。　しばし行きて、

あかひなる家多うらじ此わたり

右も左も桑ばやしある。

自分もまた咄嗟に作つた小唄、「くはを作つて、芋うゑて、蕎麥植ゑて、かひて取つたり、糸くつたり、顔は一つぶいくらは汗よ、絹は人手にみなわたす。やれ〳〵まがおい身のうへや」。

「殿さ、殿さエ、、笛吹いて、馬めして、りんがりんがら、はいどり〳〵、暇とはつてこちらを見さい、村で評判はおうむすめ。やれ〳〵とのごて來ぬものう」。

是が強て田舎先かした竹枝です。

賤が屋はおのづからある杉垣を

我物か倶よ蟬ぞ鳴くなる。

横山村のあたりは賤がやいづれも屋は上にわすれ草生ひたり花はさま百合に似てあでなる方は今一きは立まさりたれどあはれと見る人もなかるべし。

あたらさかりも人しらぬ　賤がわらやはわすれ草

かゝる里あは匂ふらん。

いつは世よりか忘られて、

この忘草は今やう非凡な作、和する擬勢も抜けました。

わすれぐさ、われも秀句をわすれ草。

かくうたひつゝ朝川の堤とゆくにあげまき打むれてそあどりをり、

里の子が魚つる棹よあつさひて

わたりてあれすあきつとふあり。

高雄橋を渡れば高尾山の麓なり。　車よりおりて坂路をゆくに左は高き梢右は細谷川さゝらきあり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

氷の音は夏にしられず涼しきは
　この谷川に秋やとむらん。

木々の下草また朝露にぬれて緑の色深きにさへづる鳥の聲々都には聞きなれぬぞ多し。　やゝ坂路けはしくなれば大川ぬし足駄を草履にはきかふるとされバよと笑ふ。　道のもくての一丁毎に石文たてり。　例は皆麓より一丁二丁と數ふるをこゝの峠よりかぞへたるなりとぞ。　暑さたへがたくなへぎのぼるとて、

鳴く蟬は聲はしぐれて聞ゆれど
　この山かげはなつくもなるかな。

鶯のなきけれバ

なく蟬の聲をよそげにきこゆなり
　春にかくれし深山うぐひす。

まバし行て十一丁目に至るに左蛇の瀧右琵琶の瀧道といふしるしの木たてるかたへに茶店あり。　入りていこふにけしきいとよし。

山ふところの暑さは非常、瀧を見ぬ内から身ははや汗の瀧を浴びましる。　たゞし木立の間から折々洩れて見える武藏野の一大平原の樣、何となく床しく思はれました。

とても無き末野はけふり隠しろく
　刷子目の雲はしづかなり。
都の方をながむれど

玉もにしきも後無くて貴富のかげも皆ひとつ。
天地一樣むかしより變てらぬ色にのこるかな。

美妙ぬしたづさへられし双眼鏡をとりて見るに、高ねになみたてる松は大空の色につゞき、麓なる玉川の水は山の腰の帶に似たり。　うたへらく、

打見おろせば谷せばく　うち見なぐれバ空ひろし。
やま青くして水みどり　此書をかきしは誰ならん。
白き色紙はくもゞもの　ひらききたちて日影さし、
色とりなせるこれ上に　歌かくひとはたれならん。

茶店に休んで居る内に前を通つた一人は處女、年は十六七、中形は單衣に絞緬の紅は帶、金茶天鵞絨の鼻緒は駒下駄を穿いて、そして束髪に結び、顔は色白で頬は薄くれなゐ、何處やらに幼な顔が殘つて居る體、そして唯一人、つかれる体も無く、登ッて行く樣、何やら不審に思はれましる。　山のもれか、麓のもれか？　都づくりとは扨も萬綠叢中紅一点！　狂女かとも評して後からつゞく内に本道は裏道を攀ぢて、見る間に上つて行きました。　己ぞの萩としをりよなさむ。　露かろし。